

埒も無きこと聞き流しぬく酒

幸

自分では意味のあることと思って話しかける相手がそこにいる。しかし、話しかけられた本人にとってその話題は埒もないことである。でも、頭からその話題を否定したり、会話を一方的に打ち切ろうとはせず、ぬくめ酒を傾けてながら、ただ聞き流しているのである。このようなことが許される人間的関係性が、両者の間にしっかりと築かれているのであろう。

鬩雲ネクタイ少し派手にして

溪水

ネクタイと称する細長い布地を首に巻きつけるファッションは、明治以降に日本に入ってきた習慣である。しかしながら、暑熱激しい日本の夏季には、男性にとってネクタイを締めるのは苦痛以外の何物でもない。最近はクールビズとして、ネクタイを省略するファッションも提供されているが、フォーマルな場面でもこれまでクールビズを通せるか微妙である。テレビ画面に出てくる政治家のクールビズの野暮ったさが目につく。

でも、暑さが厳しい夏をどうにか乗り切り、鬩雲が高空を流れる秋がやっと到来したのである。この心の弾みが、派手目の柄のネクタイを選び、涼しい秋の日の外出を楽しみたのである。

長袖にしようかすまいかそぞろ寒

溪水

気温に応じて衣服の選択（半袖と長袖、生地の手厚と厚手など）を行なうのは普通の事柄である。そういう意味では、掲句はいわゆる即いている句と言えよう。しかし、作者にとってそんなことは百も承知のことである。掲句の作者は前句の作者と同じである。秋冷の季節を楽しみたいとする気持ちが現われている。

神隠しのやうに人消ゆ芒原

貞勝

いわゆる野上ワールドの句である。すすきの原っぱを進んでいた人の姿が、突然視野から消えたのである。その事実だけを詠んだのでは、俳句として不十分であり、陳腐な句に終わってしまう。野上マジックは、そこに「神隠し」という虚構を持ち込んだのである。突然に視野から消えたことを、神隠しにあったと言うことによって、人が見えなくなったとい事実の空虚さが、くつきりと提示されたのである。

鳥の声ひろがる鳶を引ききてをり

秀一

この句は、鳥の声が一面に広がっている野原の一隅において、作者が鳶を引いたということを書いてあるだけである。鳥の声が聞こえることと、鳶を引くという動作の間には直接の関係性はない。鳥の声が広がるという麗らかさに触発されて鳶を引いたのである。鳶を引く動作には、これと言った目的は無い。心のおもむくままに鳶を引いたのである。

筆者は何時も一句の中に何がしかのメッセージを盛り込もうと苦心しているのであるが（ある意味では俳句に対する邪な考え）、掲句の作者は、俳句のメッセージ性などということを超えないし捨象して、自然体の俳句を目指したものである。邪心を捨てて、このような俳句が自然にできる境地に近付きたいものである。

籠の鳥屈託もなしそぞろ寒

秀一

作者は、籠の中の鳥には何の屈託も見られないと言う。鳥類と人間との間には現在のところ意思伝達の方法はなく、鳥の外形的状態からその内心を推測するほかはない。作者は、籠に囲われている鳥には屈託がないと断定し、これを「そぞろ寒」との季感とを配合させたのである。下五を試しに春、夏あるいは冬の季感を表す言葉と置き換えて見れば明らか通り、秋の季節の選択、しかも「そぞろ寒」の選択は絶妙である。

「籠の鳥」を「家庭に収まっている人間」であると、深読みすると、この句の言っていることは軽妙にして深いものとなる。

洪抜きメモと柿来る良夜かな

ヤエ子

「承知の通り」柿」も「良夜」も秋の季語である。しかし、「雪月花」と言われるように「月」は大きな季題であり、洪抜きメモ付きの柿が送られて来たという微笑ましい事実は、「良夜」の季語に収斂し、それに包み込まれている、と考えれば、季語の重なりはあまり気にはならないと言える。

普通であれば事前に洪を抜いてから柿を送って来るものと思われるが、今回は、洪抜きは自分でして頂戴と言うように、洪抜きメモが同封されているのである。送り手と受け手の良い人間関係が、「良夜」によって象徴的に表されている。

結界の敷居またぎぬ竹の春

友子

神社などでは普通、青竹を張りめぐらすことによって、聖域と俗域とを分けている。作者は、竹の春という季節感の中に、ここでは敷居が結界標識であることにによって、日常生活の身近な領域に結界が存在することを意識している。

【連絡事項】

十一月の定例会は吟行句会とします。吟行場所は「舞岡」地域です。集合時間は午前十時、集合場所は横浜駅西口の高島屋の正面玄関です。現地へは市営地下鉄で移動します。北坡さんが口癖のように言われていたように、俳句は全天候型のもので、どのような嵐でない限り、雨天決行とします（「冬の雨」の句が実感を持って作れるチャンスです）。